スーダンピックアップ

スーダンの診療所に安全な水を！ハフィールの改修が完了

ワッド・シュウェイン村の診療所が抱える水の問題を解決し、運営を軌道に乗せることを目指し進めてきたハフィール(ため池)改修プロジェクトが完了しました！

完成したハフィール設備

これまで掘削の様子などをご紹介してまいりましたが、この度工事が完了いたしました。〝ため池〟の改修のため、井戸と異なり「出来上がった！」感が少ないのですが…ご紹介させてください。

水量確保のために貯水池を掘削

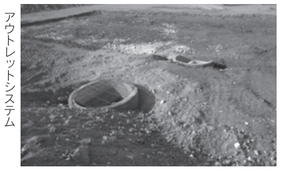
深さが足りないために、乾季になると干上がってしまうことが課題の旧ハフィールの横に、縦75m、横60m、深さ4mの貯水池を掘削しました。淵にスロープがあり、1万5千㎥の水が貯水できます。

家畜の侵入を防ぐための堤防・フェンス

ハフィール貯水池の周りに高さ2・5mの堤防と、その上に高さ1・5mのフェンスを設置しました。これにより、家畜がハフィールに侵入して水に糞尿が混じるのを防ぐことができます。家畜用の水飲み場は、別途フェンスの外側に設置しました。出入り口は施錠できるようになっており、村の水委員会が鍵を管理します。

インレットシステム（注水井、泥どめ、排水路）

空から降る雨の他、地表を流れてくる雨水をハフィールの貯水池に取り込むためのシステムです。2mの堤防(排水路)で地表の雨水を受け止め、長さ100mの注水壕から繋がる縦60m×横20m×深さ0・5mの泥どめの中に設置された深さ4mの注水井を通して、ハフィールの貯水池に水が流れ込むように設計されています。



アウトレットシステム

アウトレットシステム（取水井、浄水槽、高架タンク、ソーラーパネル）

ハフィールの水を浄化し、人や家畜に届けるシステムです。ハフィールの水面にプラスチックホースにつながった取水口を浮かべ、6mの深さの取水井にハフィールの水を取り込みます。取水井の下部には異なる粗さの土砂層からなる緩速砂ろ過装置があり、ここを通過することでハフィールの水が浄化されます。緩速砂ろ過装置を通った後の水は、隣の浄水槽に貯められます。

上水槽の水は、ソーラーパネルの動力で動かされるポンプによって高架タンクに汲み上げられます。タンクに貯水された水は、人間用、給水トラック用、家畜用の給水場からそれぞれ給水することができます。

ハフィールが改修されたことで…

これまで必要な量の水を使用できない、汚染された水しか手に入らないなど、様々な課題を抱えていたワッド・シュウェイン診療所で、これまでより清潔な水が必要な時に利用できるようになります！

また、乾季になると水が足りなくなり、4～5時間かけて遠くまで水を汲みに行ったり、高いお金を払って給水車から水を購入したりするしかなかった近隣住民2000人及び家畜8000頭も、十分な量の水を近くで手に入れられるようになります。

遠回り

《第28号》

認定NPO法人ロシナンテス
発行

〒802-0082
北九州市小倉北区古船場町1-35
北九州市立商工貿易会館 7F
TEL：093-521-6470
E-Mail：info@rocinantes.org

特定非営利活動法人ロシナンテス
ROCINANTES

スーダンで肝移植実現／学校事業……2面
10年ぶりに最初の事業地訪問……3面
ザンビアでエコー事業完了……4面
クーデターから1年／日々ツラツラ日記……5面
東北での健康農業同窓会…6面
高山理事の渡航／イベント案内……7面
事務局からのお知らせ…8面

ザンビアピックアップ

お揃いの服でお祝い！ザンビア事務所3周年

ザンビア事務所は、今年で3周年を迎えました。これまでご支援いただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

3周年を記念して何かしよう…ということで、カラフルなチテンゲでお揃いの服を仕立てました。

ザンビアには、服の仕立て屋さんがたくさんあり、好きな色・柄のチテンゲを購入して持ち込むと、簡単に安くオーダーメイドで服が作れるのです。

右から、田中(陽)、グリオ、キャサリン、セシリア、ロナルド、田中(悠)、グリフィン

チテンゲとは

チテンゲはザンビアで愛されているプリント布で、特に女性にとっては欠かせないものです。腰巻(スカート)や伝統的な衣装に使用される他、おんぶひもや頭に巻くターバンなど、様々な場面で活用されています。とにかくカラフルなのが特徴で、柄は、国旗を模したものから生き物や植物の絵が描いてあるものなど様々です。市場などで1～2メートルで売られていることが多いですが、長さを指定して購入することのできるお店も多くあります。

今回は膨大なチテンゲたちの中から、ロシナンテスカラーである青を基調としたチテンゲを探しました。すでにカットされていたチテンゲを人数分、合計18mくらい購入しました。それを、スタッフそれぞれが仕立て屋さんに持ち込み、好きな服に仕立てました(みんな、家の近所やカムワラマーケット内に御用達の仕立て屋さんがあるのです)。ドレス、腰巻、襟付きシャツ、襟なしシャツ…とそれぞれの個性が光りました。

新型コロナ、軍事クーデター、インフレ……と何度も中断しながら進めてきたプロジェクトですが、最後までやり切れたのは、応援してくださった皆さまのおかげです。本当にありがとうございました！

［スーダンのその他の記事は2・3面へ！］

事務局だより

こんにちは。東京事務所の神です。11月に入職しちょうど2週間。前職も国際NGOにおりましたが、これまでとは違うロシナンテスならではの活動を知り、とても刺激を受けています。特に、政治的に難しい地域での活動は、現地スタッフの日々の奮闘があってできていることだと肌で感じています。そんな現地の今を、支援者の皆さまにも温度感をもってお伝えしていけたらいいなと思っております。

私事ですが、小学1年生の娘がおり、私の仕事について聞かれたことをきっかけに、「みずをくむプリンセス」という絵本を読み聞かせました。ジージーという女の子の目線で、美しいアフリカの情景と水汲みの日常が描かれたもので娘のお気に入りです。

スーダンでは、ハフィールの改修が完了しました。このきれいな水で、ジージーのような多くの子どもたちが、健康に笑顔で暮らせるようにと、願っています。

私たちＮＰＯ法人ロシナンテスの名前は、小説「ドンキホーテ」に出てくるドンキホーテが乗る痩せ馬のロシナンテに由来しています。「私たち一人一人は痩せ馬ロシナンテのように無力かもしれないが、ロシナンテが集まり、ロシナンテ**ス**になれば、きっと何かできるはずだ！」と考え、「ロシナンテス」と名付けました。

今後もこれを信念として一歩一歩進んでいきたいと考えておりますので、皆さまのご支援をよろしくお願い致します。

ロシナンテス応援企業

内科・外科・消化器内科・緩和ケア内科
医療法人 明気会
岩本クリニック
理事長　岩本拓也
北九州市小倉南区中貫一丁目20-50
TEL 093-472-1281
FAX 093-472-6712

がんばれロシナンテス！
税理士法人
小城会計事務所
北海道旭川市東光8条1丁目1-1
TEL.0166-31-2313

内科／消化器内科／リウマチ科
柏木内科医院
院長　柏木 陽一郎
〒802-0064 福岡県北九州市小倉北区片野2-21-10
tel 093-921-7943 / http://www.kashiwagi-naika.com/

ロシナンテスのスタッフを応援します!!
日常の事業活動の利益を
NPO活動の篤志へ繋げたい
時計宝飾・古物売買
株式会社 ブランドリーネ
代表取締役 青山晃一
〒276-0046
千葉県八千代市大和田新田355-16-103
TEL:047-450-5720
yachiyo@e-daikoku.com
https://shop.e-daikoku.com/info/spot/detail?code=0000000239

ゆうちょ銀行（郵便局）の窓口からの振り込みで手数料が免除になります

この度、ゆうちょ銀行の振込手数料免除口座を開設しました。ロシナンテスの途上国における活動に対するご寄付は、免除口座へ郵便局窓口から払込みしていただくことで、現金利用時の加算料金ならびに硬貨取扱料金を含む払込み時の手数料が免除されます。（国内の災害支援や入会金・会費といった入金には適用されません。下記の内容をご確認の上ご利用ください。）

	新規開設 手数料免除口座（寄付金専用）	通常口座（これまでと同じ）※3
口座記号番号	00940-2-213477	01720-3-74330
加入者名	認定NPO法人ロシナンテス	NPO法人ロシナンテス
入金可能なご支援	寄付金のみ（国内災害等への寄付は除く）	各種会員の入会金および年会費、その他寄付金等
免除となる払込方法	払込票（青）※1を利用し、窓口からの払込み※2	なし
その他の払込方法	ATMやゆうちょダイレクト等（窓口以外）の手数料は払込人負担	いずれの方法でも手数料は払込人負担

※1　**同封の払込票をご利用ください。**追加でご入用の場合には、ロシナンテスまでご連絡ください。郵便局備え付けの払込票（青）もご利用いただけます。
※2　**払込みの際は、窓口で「手数料免除の払込みです」とお申し出ください。**
※3　通常口座はこれまでと変わらず利用可能です。

近年、金融機関での振込時にかかる各種手数料が増えたことで、ご支援入金の際にご負担をおかけしておりました。ゆうちょ銀行が社会貢献として行っていた手数料免除の対象が拡大され、ロシナンテスも開設の承認を受けることができましたので、ぜひご活用いただければと思います。

領収書の年一回発送についてのお知らせ

下記の対象者の方には、一年分のご寄付（1～12月受領分）をまとめて記載した領収書を翌年1月に発送しております。2022年分は、2023年1月末までに発送予定です（郵便局の配達は2～5日かかります）。もしも予定日を過ぎてもお手元に届かない場合は、ロシナンテスまでご連絡ください。

【対象者】毎月ご支援いただいている方（クレジットカード・口座振替）、年一回発送をご希望の方

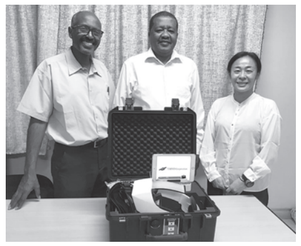
年一回発送対象以外のご寄付につきましては、ロシナンテスが受領した日の翌月までに領収書を発送しております。届いていない場合やその他（紛失や破損など）ございましたらロシナンテスまでご相談ください。

スーダンだより

Sudan

灼熱の大地で奔走するロシナンテたちの〝いま〟

執刀医の負担軽減を目指して
スーダンの病院へ影のできない手術用照明を寄贈



スーダンの首都ハルツームにある国立消化器肝臓病センターへ、無影灯ヘッドライトの寄贈を行いました。

寄贈したのは、日頃よりご支援いただいている太陽商事株式会社様よりご提供いただいた「ウェアラブル手術用照明OPELAⅢ」。器具や手指の影を減らす独自の配光設計と、動きやすさやかけ心地にこだわって作られた、手術用のヘッドライトです。

限られた設備に加え、たびたび停電する環境の中で尽力するスーダンの執刀医の負担を大きく減らすことができ、手術を必要とする人々へよりより医療を届けることにつながります。

寄贈先の国立消化器肝臓病センターとのご縁

国立消化器肝臓病センターは、スーダンの首都ハルツームにあるイブン・シーナー病院内の施設です。イブン・シーナー病院は、日本の支援によって85年に完成した消化器科・泌尿器科・耳鼻咽喉科の専門病院で、ロシナンテス設立前に理事長の川原が働いていた病院でもあります。

生体肝移植の実現を目指し尽力するアブデルムネイム医師

今回この寄贈にあたり、病院側の窓口に立ってくださったのが、スーダン肝疾患機構代表のアブデルムネイム医師です。ロシナンテスでは、2006年にイブン・シーナー病院の医師2人を、九州大学が行う生体肝臓移植手術の視察のために日本に招聘する事業を実施。そのうちの一人がアブデルムネイム医師でした。彼は九州大学での肝臓移植手術を見て、いつかスーダンでこの手術が行えるようにしたいと心に決めたそうです。

あれから16年が経過。外科医をイランや台湾に送って移植手術のトレーニングを重ね、現在は肝移植センター設立に向けて一歩一歩準備を整えています。

テスト装着する様子

© Hafsa boraei

当時の日本での研修の様子
右から二番目がアブデルムネイム医師

スーダンで初めての生体肝移植を実現
「日本で見た手術をスーダンでも」と長年尽力

2022年7月22日、スーダンの首都ハルツームにあるイブン・シーナー病院で、スーダンでは初となる生体肝移植が行われました。

インドから訪れていた医療団と共に、スーダンの医師も移植に携わりました。その際に、太陽商事様よりご提供いただいた手術用照明「ウェアラブル手術用照明OPELAⅢ」が使用されました。

翌日23日には記念式典が行われ、在スーダン日本大使館の方々と共に理事長の川原も出席しました。

この式典の主催者であるアブデルムネイム医師からは、インドによる継続的な支援によって実現したことへの感謝に加え、「2006年にロシナンテスが実施した九州大学での研修に参加し、生体肝移植を実際に見たことが始まりだった」という旨のコメントもいただきました。そこから長い時間をかけ実現に向けて動いてきた意思の強さに敬意を表するとともに、引き続きスーダンの医療環境の向上に尽力したいと改めて感じたできごとでした。

国立消化器肝臓病センター

学校事業、工事まで完了！
ボロボロだった学校のビフォーアフター

北コルドファン州で実施している学校事業について、工事が完了しました！

ラマダン後の祝祭日が終わった5月から工事を開始、約半年の工事期間を経て、10月に小学校3校すべての工事を終えることができました。

現地通貨の大暴落や建築資材の高騰で何度も見積もりを取り直したり、燃料不足で車の燃料確保に奔走したり、断続的に続く抗議活動でちっとも仕事が進まなかったりと、あげればきりがない程の社会的困難がありましたが、現地パートナーの協力でなんとか完成までこぎつけることができました。

ボロボロだった校舎を補修したり新しく建設したりしました

きれいになった黒板！
（実は上の方は先生の手の届かない高さになってしまったというミスもありましたが…涙）

現在、これから実施予定の研修や啓発活動の準備を行っています。地域住民、教員、生徒の代表による学校管理委員会を設けて、各種施設の管理方法や使い方等を伝えていきたいと思います。

建設業者の現場技術者／ムハンマド アダム

建設業者の現場技術者／アフマド イドリース

建設業者の現場監督／ムハンマド アジャブ

コンサルタントのアシスタント／マリアム

コンサルタント（専門家）／ハーティム

10年ぶり！最初の事業地、ガダーレフ州ハサバッラ村を訪問

今回、様々な事情で10年間一度も訪ねることができなかった、ロシナンテスの最初の事業地への再訪問が叶いました。感動の再会を果たし、支援のその後を直接見ることができましたので、皆さまにご報告です。

ガダーレフ出張がきっかけで始まったロシナンテスの支援活動

設立者の川原が大使館の医務官であった際、ハエに刺されて感染する寄生虫疾患であり、致死率の非常に高いリーシュマニア症の専門病院の視察のためにガダーレフ州を訪れました。病院には患者さんが溢れ、敷地内にある木の下に置かれたベッドには、一つのベッドに2人の患者さんが寝ている状態でした。その様子を見て、この地域でできることをしようと決心したことが、ロシナンテス設立に至るひとつのきっかけとなりました。

村に飾られていた当時の活動の様子

川原が外務省を辞め個人的に医療支援を始めてしばらく経ったころ、偶然ガダーレフ州保健大臣にお会いすることがありました。その保健大臣から、支援をしてくれないかと依頼されたのがハサバッラ村でした。2006年のことでした。そこには建設されたばかりの診療所があったのですが、スタッフは誰も派遣されておらず、建物はあるものの設備は何もなく、診療所として全く機能していない状態でした。

ハサバッラ村での支援活動

川原は、ハサバッラ村の村長であるハサン氏の家に泊まり込み、24時間体制で診療に取り組みました。それと同時に村の人たちと協力して、診療所の医療機材の設備を整えてくれるようにガダーレフ州財務省に陳情にも行きました。数か月陳情を繰り返したことで、最終的に、財務省は医療機材や机などの診療所の備品全てを調達してもらうことに成功しました。

診療所の運営に加えて、中古の救急車を日本から調達し、井戸の改修や給水所の建設を行い、女の子が通うことができる小学校を作りました。村で行われる結婚式や子供ができたお祝いに参加し、誰かが亡くなれば弔問を行いました。こうしたことを続けるうちに、徐々に村の人たちが我々を深く受け入れてくれるようになってくるのが肌感覚でわかるようになったと川原は話します。

活動停止命令

スーダンにはHAC(Humanitarian Aid Commissioner、人道支援委員会)というNGOを管理する政府機関があります。私たちNGO職員の安全のためとのことですが、HACから移動許可証を発行してもらわないと村落部へ移動ができない、HACが認めない限り日本人スタッフの入国ビザが取得できない(明確な理由なくビザが降りないことも過去に何度かありました)など、様々な規制を課されます。

2011年、HACがロシナンテスを含む欧米系の7つの団体に活動停止命令を出しました。当時、スーダンは米国からテロ支援国家に指定され、経済制裁も受けており、日本を含む欧米諸国との関係は緊張していました。活動地をあとにする団体もありましたが、ロシナンテスはHACと交渉を行い、1年間の猶予をもらい、村の人々のみで運営できる体制が築けるよう出口戦略を行った上で、この地を離れました。

これまでに何度も、フォローアップのために同地を訪問したいとHACにお伺いを立ててきましたが、許可が出ないまま10年が経ってしまいました。

10年ぶりのガダーレフ訪問

今年に入ってから、ローカルスタッフが新たな情報を入手しました。それは、新規事業を行う準備があるのであれば、そのための現地調査を目的として、ガダーレフ州を訪問することが可能というものでした。ザンビアで行なっている事業をスーダンでも展開できないか検討していたため、そのための調査という形で申請を出し、10年ぶりにガダーレフ州を訪問する許可を得ることができました。お目付役として3名のHACスタッフが同行することになりましたし、ハサバッラ村に行けるかどうかは現地で検討すると言われ、村の人々にスケジュールを伝えることもできずもどかしい気持ちもありましたが、何はともあれ本当に大きな1歩でした。

結果として、ハサバッラ村への訪問が叶いました。ガダーレフ州の保健省で協議を行っている際に「今から」と許可が出たため、村の人々に連絡することもできないまま、突撃訪問の形となりました。

念願のハサバッラ村訪問

川原が車から降りると、最初は怪訝な顔をしていた村の人々でしたが、川原だとわかると「ロシナンテス！」「カワハラ！」と大きな声を発しながら、次々と駆け寄ってきてくれました。「元気だったか」「あの時のメンバーはどうしているか？」など、みんなロシナンテスのことを覚えてくれていました。残念ながらロシナンテスの到着を心待ちにし、いつ来るのか、何度も電話をくれていた村長のハサン氏は、ちょうど農地に行って連絡が取れず再会が叶いませんでしたが、多くの村の人たちに挨拶をすることができました。

事業のその後…

診療所、救急車、給水所、それに女子小学校、全てが稼働しています。救急車や給水所はこの10年のうちに数回故障したようですが、有料体制を敷いていた診療所や給水システムで村の人たちは上手にお金を管理していて、その中から修理代を全てではないですが負担できたとのこと。足らない分は、州政府にお願いして支払ってもらった、などと我々が一緒になって事業を運営していたのと同じやり方を踏襲してくれていました。

ハサバッラ村の子供が大学に

村の人たちと話すうちに、村から大学に進学する子が出ていること、さらには女子小学校を卒業した女の子で看護の勉強をしに大学に進学した子もいるということを知りました。川原は感動で思わず泣いてしまったそうです。ロシナンテスが活動を始めた当時、ハサン村長をはじめとして大人の大半は読み書きができませんでしたが、活動を進めるうちに村の人々が学ぶことの大切さを理解してくれ、自分の子供たちには高等教育を受けさせていたのです。

あらゆる事業を自分たちの手で継続させてきた村の人たちや、大学で学ぶ青年たちを見ていると、機会と環境さえあれば、自分たちの手で進んでいけるということを改めて時間しました。

スーダンの政治は未だ安定しておらず、経済も悪化の一途ですが、現在の発展したハサバッラ村、この村出身の大学で学ぶ若者たちを見ることができて、暗闇の中の一筋の明るい光を見たようにも感じます。彼らと共に次のステージに進めるよう、引き続き頑張りたいと思います。

現在の女子小学校の様子

何度か故障もしたものの、いまも近距離の輸送で活躍する救急車

現在も大切に使われていた診療所のスタッフ紹介

成果の出た事業を横展開 郡内の5つの診療所でもエコー研修を実施

昨年度の事業では、マザーシェルターを建設したムワプラ診療所に小型エコーの導入と診断方法の研修を実施しました。このムワプラ診療所でのエコー導入により、診療所での出産の増加、健診受診率の上昇など、成果を上げることができました。こうした実績に加え、エコーによる診断の評判が大変良く、チサンバ郡の他の地域からも要望が寄せられるようになりました。

チサンバ郡内には、ムワプラ診療所の他に5か所の診療所(チサンバ診療所、モンボシ診療所、カナカンタバ診療所、チベンビ診療所、マロンベ診療所)があり、これまでの妊婦の出産前のエコー診断受診率はどこも数%のみでした。ザンビアでは産前のエコー健診が推奨されています。しかし近くの診療所で受診ができない村落部の妊婦さんたちは、町の大きな病院へ行くしかなく、交通費や身体的な負担が大きいことから受診をあきらめるケースが多いのです。

またエコーのない村落部の診療所では、トラウベ聴診器と呼ばれる伝統的な診断器具と触診のみで診察を行っています。しかし、このトラウベ聴診器を使用して妊婦さんと赤ちゃんの正確な情報を得るには相当な技術と経験が必要で、危険なケースを見逃してしまったり、見逃しを防ぐために大きな病院での受診を進めるケースが増えたりしており、妊婦さんたちの負担が大きくなっていました。

チサンバ郡の保健局や地域の伝統的リーダーであるチーフからの依頼もあり、関係者と共に協議した上で、今年はこの5つの診療所へ小型エコーの導入と診断方法の研修を行うことになりました。2022年6月から研修を開始し、およそ3か月かけてすべての施設での研修が完了しました。

ザンビア人による ザンビア人のための研修

ザンビアの農村部にある診療所レベルの医療施設では、人材不足、財源不足により、医師は配置されておらず、医師の次点にあたるクリニカルケアオフィサーや看護師、助産師が妊産婦を含む全ての患者さんのケアを行っています。そのため、今回の研修でも各医療施設のこうした役職の職員が研修対象となりました。

全ての診療所の職員が一度に集まって研修を行うことができればすぐに終わるのですが、それぞれの診療所での仕事があるため、ロシナンテスのスタッフと講師の先生が各地へ出向く形での研修実施としました。講師の先生は昨年と同様にザンビアの産婦人科医師の先生を招き、研修が終わってからも困ったときに助言を仰げるような関係を築いています。

研修は、各診療所でそれぞれ5日間、ムワプラ地域での研修と同様に、胎児の頭の位置や妊婦の胎盤の位置等、「正確に胎児や妊婦の危険な状態を見極める」ということに集中した内容で行われました。この内容に特化する理由としては、小さな診療所では対応できないような出産を事前に見極め、町にある施設が整備された安全な場所での出産を促すことができるからです。

また、性別の診断を行うと、万が一間違えてしまった場合に、地域住民と診療所職員との間の余計なトラブルが起こる可能性があるので、それは避けた方が良いという、講師の先生からの現地ならではの助言もありました。

真剣な表情で取り組む職員と講師の先生

パソコンで行う操作について学ぶ

初めての地域で感じた困難

昨年エコー事業を行ったムワプラ診療所では、エコー事業の実施までの間に、ヘルスボランティアの育成やマザーシェルターの建設等を通してロシナンテスと地域との関係が構築できていました。一方、今回の5つの医療施設ではこのエコー事業が初めての協働で、これまでやり取りのなかった各施設の職員さんたちとコミュニケーションを取りながら、実際のエコー導入に至るという大きな違いがありました。

そのため、うまくコミュニケーションが取れなかったり、お互いに探り合っているような雰囲気があったりと、ぎこちないスタートとなった診療所もありました。しかし、さすがはザンビア人といったところでしょうか。5日間の研修を終える頃には、各診療所の職員とロシナンテスのローカルスタッフはすっかり打ち解けて、笑顔で研修を終えることができました。

研修を行った各診療所では既に職員によるエコー診断が行われています。やはり、地域の妊婦からの評判が良い様子で、何件もの危険な状態をしっかりと見つけることができたという話を聞いています。ロシナンテスでは引き続き、各診療所でのエコー診断の実施状況をモニタリングし、改善に努めていきます。

人材不足解消を目指して スタッフハウスの建設

マザーシェルターの建設が完了したムワプラ診療所で、診療所に勤務する職員のためのスタッフハウス(職員住居)の建設を行いました。

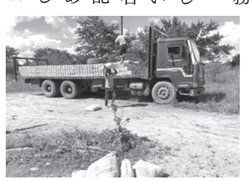
あとは外壁をペイントするのみとなったスタッフハウス

どうして家の建設が必要なの?

ムワプラ診療所では3名の職員が勤務していました。風邪やケガ等の外来患者さんの対応、産前健診に来た妊婦さんやマザーシェルターで出産を待つ妊婦さんの健診、実際に出産を迎えた妊婦さんの介助、診療所から遠く離れた地域での集団母子健診など、業務は多岐にわたります。傍から見ていても到底3人で手が足りるような業務量ではありません。

診療所がカバーしているエリアが広いため、本来4~5名は医療従事者が配属される必要がある地域です。しかしムワプラ地域には新しい職員が暮らすための住居がなく、これまで十分な人員配置を行うことができていませんでした。

そこで、ムワプラ地域の住民とチサンバ郡保健局と共に協議を行い、新しい職員を派遣するための住居を建設することになりました。郡保健局からは、建設完了後にはすぐに職員を派遣するという約束を交わし、スタッフハウスの建設に着手しました。


必要な資材を運び込む

住民主導での建設がスタート

地域住民の動きをサポート

実はこのスタッフハウスについては、ロシナンテスが事業を開始する前から「十分な職員を配置してもらうために必要な物である」という認識が地域住民の間にあり、自分たちで寄付を集めて、建設資機材購入の準備を行っていました。そのため、ロシナンテスがその住民たちの動きに協力する形で行っていました。

今回のスタッフハウス建設では、建設会社にお願いするのではなく、地域の中で設計図を描くことができ、建設そのものも行うことができる住民が中心となって建設を進めました。

建設したのは、1世帯あるいは独身であれば2人が暮らせる程の大きさの家です。

雲外蒼天

続く政治危機…スーダンの今

2021年10月25日早朝、スーダンで軍によるクーデターがありました。それから1年、スーダン国内では引き続き民主化を求めるデモが頻発していますが、軍政のままでもよいのでは、と考える人々も増えてきており、国民の意見も割れています。

民主化への歩みを止めた軍によるクーデター

スーダンでは2019年、長年の独裁体制を敷いていたバシール政権が崩壊。その後文民と軍の合意に基づいた統治評議会によって民主化に向けた共同統治が行われていました。その合意では、暫定期間の前半は軍人がトップとなり、後半は文民がトップを務め、その後2023年に選挙をして正式な政府を樹立となる予定でした。

2021年10月に暫定期間の前半が終わり、11月から国家元首は文民に移されることになっていました。しかし、その移管を前に、文民である首相のハムドク氏を始め複数の大臣が拘束され軍が一方的に暫定政権の解散、軍主導の統治評議会の発足を宣言しました。

それを受け民主化勢力は、一方的な措置で受け入れられないと表明し、大規模なデモを繰り返してきました。国際社会からもクーデターに対して非難の声があがり、世界銀行やアメリカによる支援凍結や、アフリカ連合によるスーダンの参加停止が発表されました。

再びハムドク氏が首相に、しかし民主化勢力は…

クーデターからおよそ1か月後の2021年11月21日、軍トップのブルハン氏とハムドク氏は合意文書を交わしました。内容は、拘束している政治家ら全員を解放することと、ハムドク氏を再び首相とし、文民による新たな内閣を発足させ、2023年7月までに総選挙を実施するとされています。国連や欧米諸国はこの合意を歓迎すると発表しました。

しかし、今まで市民を牽引し、2年前に首相にハムドク氏を指名した民主化勢力は、軍との合意を受け入れられないと表明しました。また、クーデター前に大臣を務めていた閣僚12名が軍との合意に反対し、辞任を申し出ました。「流血の事態を止めるため」に復職に合意したと話すハムドク氏ですが、軍への妥協だとの批判にさらされる形となりました。

ハムドク氏が辞任、トップ不在の状態に…

その後もハムドク氏は民主化勢力からの支持を得ることができないまま、2022年1月に、政治的混乱を収めることができなかったという理由で首相を辞任しました。軍側のトップであるブルハン氏は、速やかに新たな首相を任命する必要があると述べたものの、民主化勢力と軍との間で妥協点を見いだすことができず、そこから2022年12月現在に至るまで首相不在の状態が続いています。

軍によるクーデターから1年を機に、何らかの動きがあるのではと期待されていましたが、リーダーシップを取れる人が出てこないという課題を抱えたまま膠着状態が続いています。引き続き民主化を求める勢力がいる一方で、混沌が長く続くことから、民主化はもう難しいのでは、バシール政権下(軍事政権)のほうが経済状況はよかったのでは、という声も増えてきており、国民の意見も大きく割れています。

ブルハン氏は、将来的に文民による新たな暫定政権が成立した後に、軍主導の統治評議会を解散し、新たに軍高等評議会を設置することを約束しています。政治面は暫定政府が担い、安全保障と防衛については軍高等評議会が担うことになるとみられていますが、時期や手法については曖昧な点が多いことから、この約束にも懐疑的な見方が多く、今後もスーダンの政治危機はしばらく続きそうです。

あきらめていない優秀な若者たちが希望

混乱の最中にあるスーダンですが、淡い光の見える場面もあります。例えば、民主化を求めるデモが始まってから4年が経ちましたが、現在も〝平和的な形で〟デモが継続され続けていること。国民の意見が割れてきているといえど、この長い期間に、多くの人々が参加するデモを継続し続けているスーダン国民の不断の努力は本当に素晴らしいものです。

またスーダンの経済は究極に落ち込んでいる状態にありますが、そんな中でもスタートアップとしてビジネスに挑戦する若者たちが首都には集っています。またこうした若者の多くは民主化をあきらめておらず、多方面で活躍を見せています。優秀な若者たちがまだ国内に残っているということは、大きな希望になります。

スーダンの人々があきらめない限り、私たちも寄り添い続けていきたいと思います。

日々ツラツラ日記⑫ 「ご支援に感謝」

こんにちは、ロシナンテスの川原です。9月半ばから10月半ばまで日本に一時帰国していましたが、現在はスーダンに帰任しています。帰国中、私にとって強烈な印象を残してくれたイベントがありました。熊本であった浜田省吾さんのコンサートです。

コンサートがある1週間前に私は誕生日を迎え、57歳となっていました。浜田省吾さんは幾つなんだろう?と思い調べてみると、なんと69歳です。12月の誕生日を迎えると70歳ではないですか!

年齢を全く感じさせないエネルギッシュなステージに、心底酔いしれてしまいました。その圧倒的なパワーに全身に震えがきたほどです。この熱量は何なのでしょうか?人間の持つ底しれないパワーを浜田省吾さんに見せつけられた思いでした。アフリカという舞台で、エネルギッシュな活動を今後もやっていこう!とあらためて心に決すことができました。

浜田省吾さんと仲間の皆さんから構成されるJ.S.Foundation様より水事業へ多大なご支援をいただいたため、御礼をお伝えするという目的も達成できて一安心しました。浜田省吾さん、ファンの方々、J.S.Foundation様、本当にありがとうございました。浜田省吾さんに比べると小僧の私ですが、今後も頑張っていきます!!

NEWS & IMFORMATION お知らせ＆イベント情報

高山理事がロシナンテスの アフリカ・ザンビア事務所での活動に参加

地域医療と公衆衛生の専門家で、2018年よりロシナンテスの理事を務める高山義浩医師が、2022年11月～2023年3月の間ザンビア事務所へ駐在します。高山医師には現場の詳細な視察を通して、事業運営の改善やニーズ調査、新規計画立案等について助言をいただく予定です。

高山医師は新型コロナウイルスの流行を受けて、沖縄県立中部病院で感染症内科医として勤務しながら、厚生労働省や沖縄県の政策参与として新型コロナウイルス感染症対策に関する様々な提言を行っています。今回は沖縄県立中部病院の医師としての籍は残したまま、期間限定で拠点を移すことになります。

現地へ赴任する高山医師より抱負

「周産期における母子の安全を守ることは、地域医療と公衆衛生における主要な目標のひとつとなります。ただし、お産とは、女性を中心とする地域文化の要でもあり、長い歴史のなかで紡がれてきた習俗という側面もあります。危機管理という男性的な考え方で押し切られてしまうこともあるため、できるだけ女性たちの語りに耳を傾けながら、ロシナンテスらしい草の根活動に貢献できればと考えています。」

理事長・川原よりコメント

「高山先生は沖縄の方々の気持ちを大事にされて地域医療に尽力されており、その観点からロシナンテスの医療支援活動にアドバイスをいただいています。ともにザンビアの地域医療に取り組めることは無上の喜びです。将来的に高山先生はザンビアで得られた経験をもとにして、沖縄をはじめとする日本国内の地域医療にこれまで以上に貢献してくださることでしょう。この取り組みをきっかけに、多くの若い医師が高山先生に続いてくれることを期待しています。」

アフリカ開発会議（TICAD8）で 2つのサイドイベントを開催しました

2022年8月27日、28日にアフリカのチュニジアでアフリカ開発会議（TICAD8）が開催されました。ロシナンテスは今回、2つのサイドイベントをオンラインで共催しました。それぞれ日本語への通訳付きのアーカイブ動画がご覧いただけますので、ご関心のある方はぜひチェックしてみてください。

母子健康手帳と情報のデジタル化：アフリカの母子に対する恩恵と公衆衛生への貢献

1つは、長崎大学とWHO協会との共催で開催しました。日本にある母子手帳をデジタル化することと、そこで得られた保健情報を公衆衛生的に分析しヘルスセンターを通じて母親にお知らせするようなシステムを目指す活動について、関係者が共通認識を持ち、よりよい仕組みを考案するための情報共有と意見集約を行いました。

▼アーカイブ動画はこちら
http://www.tm.nagasaki-u.ac.jp/ticad8-mch-digital/?page_id=6015

創薬やアフリカ伝承薬活用による健康的かつ、より良い生活を求めて

もう1つは、アフリカの薬草を生かして創薬を目指すことをテーマに熊本大学との共催で開催しました。熊本大学は、これまでにアフリカの教育機関等との連携のもと、アフリカの伝統薬の安心安全な利活用を目指し様々な取組みを行っています。アフリカの公衆衛生の向上と健康的な暮らしの一助になると、ロシナンテスも協力している取り組みについて意見交換しました。

▼アーカイブ動画はこちら
https://www.youtube.com/watch?v=I-ZeSdbRp8M

参加費無料オンラインイベント開催!!

お申込フォームの利用が難しい方は、メールもしくはお電話でご連絡ください。

A. メール
宛先：info@rocinantes.org
件名：活動報告会申込
メール本文に以下の項目のご記載をお願いいたします。
・参加希望のイベント日付
・お名前
・メールアドレス
・事前に聞きたいことなど

B. お電話
認定NPO法人ロシナンテス
TEL：093-521-6470（受付：平日10時～17時）

ぜひご参加下さい

2023年1月8日(日) 16:00開始／17:30終了【ご支援者様限定】
皆さまのご支援でできたこと～2022年を振り返って
クーデターや新型コロナ、インフレなど、思うように事業を実施できなかった数年を経て、2022年は様々な事業を動かすことのできた年でした。これもひとえに、応援してくださったご支援者の皆さまのおかげです。感謝の気持ちをぜひ直接お伝えできればと思います。
◎対象：ロシナンテスのご支援者様
◎申込URL：https://www.rocinantes.org/news/event/?no=147

2023年2月5日(日) 16:00開始／17:30終了
安全な学び舎を！スーダンの学校事業完了報告会
北コルドファン州の学校で実施している学校事業について、12月の看板設置をもって完了となります！教室不足や校舎の壁の崩落など、厳しい環境を改善すべく進めてきた学校の建設・改修事業について、駐在職員がご報告します。
◎申込URL：https://www.rocinantes.org/news/event/?no=146

ちょっと変わった報告書

「健康農業 亘理いちご畑 同窓会 2022」に寄せて

2022年6月、東日本大震災後の支援活動の1つ、「健康農業事業」の同窓会を開催しました。
開催にあたっての経緯や当日の様子を、元東北事業部長の大嶋一馬さんがブログにまとめてくださったものを、一部抜粋してご紹介します。全文はウェブサイトをご覧ください。
←左記QRより https://www.rocinantes.org/blog/japan/4576/

亘理のじいちゃんばあちゃんに会いたい

2022年4月に、元ロシナンテス東北事業部の平林さんより、ニュージーランドから一時帰国をするという連絡があった。それでは東北事業部のメンバーで集まって旧交を温めましょうと伝えると、亘理のじいちゃんばあちゃんに会いたいとの返信があり、そのことを当時のロシナンテス職員のみんなに伝えると、「こんな時期だけどみんなで集まりたい」という意見にまとまった。

健康農業に参加していただいちゃんばあちゃんの中には、すでに亡くなっている方や施設に入居している方もいた。「健康農業亘理いちご畑」の解散時（2016年3月）、参加者の平均年齢が79歳だったことを思うと、現在の平均年齢は85歳となり、早くしなければもうみんなで集まることができなくなる！平林さんの帰国は天啓だ！とも思え、「健康農業 亘理いちご畑 同窓会2022」を開催することに決めた。

当時のメンバーの力を集結

それからは、週に一回程度ウェブ会議を開催し、内容を煮詰めていった。亘理町での準備は参加者のうち最若手の三戸部さん（75歳）に請け負っていただき、集会所の手配から、旧参加者の住所調査、プロジェクターの手配、お弁当の手配、その他細かいことまでもろもろとやっていただいた。

準備を進めるうちに二つの大きな問題にぶつかった。①集会所（イベント会場）までの送迎をどうするか？②事情があり参加できない方をどう扱うか？の二点だ。結論から述べると、①イベント会場までの送迎は、足りない部分はレンタカーを借りてでも以前のように私たちでする②具合が悪い足が痛い等の理由で不参加の方はイベント前に時間を作って会いに行くと決まった。本当は言いたくないのだが、これが前述した決断に難儀した点で、①②とも私は反対であった。送迎車は自動車保険に加入しているので、万が一事故があった場合でも補償はできるが責任をとれないのではないか？時間を切り詰めて不参加者に会いに行ったりすると、時間的な焦りから不慮の事故等が発生するのではないか？というのが私の主張であったが、元職員の茜と早笑は「私たちが迎えに行くとじいちゃんばあちゃんが喜ぶ。私たちが会いに行くとじいちゃんばあちゃんが喜ぶ」と言った。私は「責任、責任」と叫び、彼女らは「じいちゃんばあちゃんが喜ぶ」と言うのだ。

たった6年で…忘れかけていた当時の志

頭をガーンッと殴られたような気がして、当時を思い出した。

私たちは健康農業の参加者のじいちゃんばあちゃんと、「活動中に事故や怪我を負った際に賠償責任を問わない」というような念書みたいなものを取り交わさなかった。そして私はじいちゃんばあちゃんに「みなさんが参加しているこの健康農業がいかに楽しいかを家に帰ってご家族にたくさんお話ししてください！皆さんの楽しさがご家族に伝わると、仮に事故等があっても、ご家族は私たちに責任をとれなんて言いません！順番でいくと皆さんは私たちスタッフよりも先に逝ってしまいます。津波に被災した後、残された短い時間をいかに楽しく過ごしていただくかという一点に私たちは努力をしています。その結果、みなさんが楽しいと感じてくれているのなら、それを皆さんの心の中にしまわずに、ぜひご家族にどんどんお話ししてください！」と繰り返し伝え、そのとき皆さんがニコニコしながら深く頷いていたことを思い出した。

それがどうだろう、宮城を離れたった6年しか経過していないのにもかかわらず、人の喜びより責任を避けて通ることを優先しているのだ。若い二人に生きる道を教えられた気がした。

待ちに待った亘理での大同窓会、開催！

当日11時に亘理町上浜街道集会所に到着するとすぐに準備に取り掛かった。この同窓会の楽しさは言葉に表すことができない。うれしかったのは、みなさんがこの日を心から楽しみにしていてくれたことだ。そして、「健康農業亘理いちご畑」は参加者40数名の活動であったが、29名も参加してくれたことのみならず、一人も欠席しなかったことに感激した。

そして、半分以上の方がご家族に送迎をしていただいていた。顔を合わせた何人かのご家族からとても感謝され「ずっと前から今日を楽しみにしていたんですよ！」という言葉をいただいた。「健康農業」の活動がいかに楽しいのか、みなさんご家族に話してくれていたんだなぁと感慨深かった。

宮城を後にして6年がたち…

振り返ると、東日本大震災から11年が経過し、ロシナンテス東北事業部が宮城を後にして6年が経過したが、復興支援がいつの間にか協働する活動となり、仲間となって友達となった。川原のアフリカでの活動もこのような経緯をたどっていることだろう。

ロシナンテスの活動は、相手の立場になり寄り添い支えながら協働し、現地の人だけでできるようになるように促していくことだと思う。アフリカであろうが東北であろうがその理念は変わりない。それができるのも多くのロシナンテス支援者が寄付や様々な形で背中を押してくれたおかげだと思う。そして、現地で活動するロシナンテたちが皆さんになり代わり濃密な時間を過ごす。この濃さとでもいうべき時間を皆さまにも共有していただきたく、乱筆乱文ではありますがちょっと変わった報告書をしたためさせていただきました。

今回「健康農業 亘理いちご畑大同窓会2022」を開催して、みなさんのご支援を心からありがたいと改めて感じました。この場を借りて衷心より感謝申し上げます。

認定NPO法人ロシナンテス
元東北事業部長 大嶋一馬